

陳舜臣さんを語る会通信

NO.84

Oct. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年10月1日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

1971年残りの一冊『南十字星を埋めろ』、1972年の『笑天の昇天』

本号では、1971年、豊作だった推理短編集、残りの一冊、『南十字星を埋めろ』（実業之日本社）と、1972年刊行の推理短編集『笑天の昇天』（読売新聞社）を取り上げました。
(編集委員 橘雄三)

徳間文庫版『南十字星を埋めろ』
中島河太郎氏「解説」抜粋転載
傍線は編集委員の加筆

昭和三十六年、「枯草の根」によって第七回江戸川乱歩賞を受賞した陳舜臣氏は、異色の素材と重厚な筆致で注目された。これを契機として作家生活に入った氏は、華々しい活躍をみせ、すぐれた長短篇で読者を喜ばせた。

受賞の翌年には早くも四長篇が書かれた。「三色の家」は第一作に登場する探偵役陶展文の留学生時代に遡り、神戸を舞台に、華僑の海産物問屋にまつわる密室殺人を扱っており、「弓の部屋」は神戸にある異人館の会合の席で起こった殺人事件を解いている。

謎解き物が推理小説の基本であるから、まず基本をみっちり修得しよう、またその中でも密室物が核ともいべきテーマだから取り組んでみたというのが著者の信念だった。

短篇でも著者がもっとも好きな詩人だという李賀を登場させて、唐代の密室殺人に仕立てた(※)のは、情理兼ね備えた作品として成功している。

著者はさらに清末や日中戦争、遡っては十七世紀に時代を選んだり、インドを舞台にするなど、素材が変化に富んでいるばかりか、それにふさわしい謎を用意して、千遍一律の現代犯罪に飽きあきしていた読者を楽しませてくれた。



徳間文庫版表紙

補足 ■傍線(※)は「方壺園」

一九八五年八月

推理小説、現代小説、歴史小説にめざましい成果を挙げている著者だが、長篇の蔭にこういう紅紫とりどりのすぐれた短篇のあることを、あらためて紹介したい。

(この後に続く各編要点は一覧表にまとめたのでそちらをご覧ください。)

著者は登場以来、すぐれた長篇を発表し続けたが、その間、短篇の数も決して少くはない。これらの長篇が執筆された昭和三十九年から、四十六年に至るまでの短篇を収めたのが本書で、四十六年十二月に刊行された。

以下、「解説」の抜粋転載に戻ります。

・「黒いヒマラヤ」(三十九年)
・「青玉獅子香炉」(四十三年)、直木賞
・両作で昭和四十五年日本推理作家協会賞を受賞した「玉嶺よふたび」と「孔雀の道」
・「北京悠々館」(四十六年)
に言及していますが、省略します。

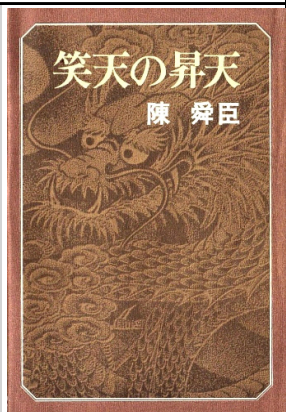
題 初出	『南十字星を埋めろ』各編紹介(1) (中島河太郎氏の「解説」抜粋引用。一部加筆)
あほだらお秋 『問題小説』 昭和46年9月号	じゃがたらお春に因んだ綽名のついた女性が主人公。彼女は魅力に富んでいたのに、身边には崇拜者が絶えなかったが、彼女に近づいた人は離れていった。男性を経験した彼女は、精神的に開眼させられて、魂に傷を受けている人々を肉体でよろこばせた。つぎには肉体の開眼で金が欲しくなってきた。だが、結局は金銭もむなしく、ひたむきに人間を求める彼女の振幅の大きい生き方が、軽妙に描かれているし、彼女の身边の人物がそれぞれ個性を具えている
腐った紅葉 『小説宝石』 同45年1月号	始末のわるい欠陥人間の話である。アンコ稼業の彼は一ヶ所におち着けなかった。ぶっ殺してやりたい奴に必ず出くわすのである。それを避けるためには相手の前から姿を消すのがいちばんいいのだが、こんどの管理人も憎らしいが、そこで走り使いをしている白痴に近い女の子に奇妙な愛情を寄せてしまったのだ。彼女が管理人にいたずらされて金を貰ったのを見て、男の怒りが燃えた。殺人は簡単にやってのけ、疑われぬよう工作もしたはずだが、思わぬ齟齬(そご)があった。

『南十字星を埋めろ』各編紹介(2)

題 初出	『南十字星を埋めろ』各編紹介(2) (中島河太郎氏の「解説」抜粋引用。一部加筆)
疑わしきは 『オール讀物』 同44年10月号	財閥御曹子の体験譚である。東南アジアのA国は、形式的には民主形態をとっているが、本質的には独裁国家とそう変らない。現地でそう説明されたにもかかわらず、アバンチュールを求めてすばらしい女性に邂逅したが、そのあとがいけなかった。殺人容疑で逮捕されて公安局の特別調査官にさんざん絞られたあげく、やっと証拠不十分で釈放されたのが題名の由来である。その蔭に隠されたA国の謀略もなかなかのものだが、せめてもの腹いせの祝辞で溜飲をさげる結末が利いている
秋の雁 『小説宝石』 同43年11月号	天衣無縫、どんな環境でも、楽天的に生きて行ける女性を描いて、面目躍如たるものがある。二十年の間に「私」は秋雁女史となんとか会ったが、彼女はきまって臨月に近いからだだったという発端から、まず意表をついている。「私」と彼女とのあっさりした交情が背景になって、結婚を反対される男女の苦悩が前面に押し出される。どのような事情によるのか、二人の交際に対する妨害工作が着々として進行する。著者の見事な作品構成がサスペンスを盛りあげ、その経緯を語るエピローグは圧巻である。 諏訪山公園も舞台の一つに →  kobe-park.or.jp/cgi-bin/meisho
青年と幻影 『小説現代』 同44年9月号	なにか不正な物品の取引が街頭連絡で行われたらしいが、青年は間違えられて五十万円の札束を渡された。ちょうど母親の手術費用に入用で、ネコババをきめこんだのはやむを得ない。一年後、新宿で声をかけてきた見知らぬ女性と一夜をすごしたまではよかったが、その女性は彼を承知の上で誘ったもので、かつて街頭連絡をしたことを打ち明けた。疑うことを知らぬ青年が、善意の策略に乗せられ、さらに悲劇の種を蒔いたことをさとしたとき、炎と氷による拷問だと痛感した
知られざる幸運 『推理界』 同43年2月号	二人の男をあやつるモデル嬢の話。一人は仕事の関係で知りあった青年で、父親の経営する会社の専務である。もう一人は幼な馴染で、彼女の中学生の時から目をつけ、自分が育てあげたつもりでいる。いまは薬品メーカーに勤め、彼女との間に肉体交渉をもっている。お互いに殺意を抱いた男女が、自分のことを考えるのが精一杯で、相手の動作やことばを取り違えながらの殺人演技はスリル満点である。しかもそれを一転させた結末が心憎い
良心の限度 『別冊小説宝石』 同42年夏季特別号	台湾のバナナ自由化をめぐる珍取引がユーモラスに描かれる。日本のバナナ輸入業者を台湾側が審査する秘密審査員の日本派遣という怪情報が流れ、輸入業者は恐慌を来す。利権を確実に手に入れたいある会社では、秘密審査員との間に、人間の良心の限度を論じるという形式の買収談合をもって、うまく事を運んだ。ちょっとした工夫でさらにうわ手をいく人があるのだから油断がならない
揺るぎなき名声 『小説現代』 同42年2月号	底抜けのお人好しと他人からは思われている男の話である。むかしの愛人とその良人との夫婦喧嘩を仲裁して、うまくいったと喜んでいると、友人からはおめでたいやつだといわれて、なるほどといまじくなった。その翌日、良人が殺され、細君に容疑がかかり、結局、当人が自首する羽目に陥る経緯が巧みに語られている。どこまでもお人好しの名声に崇られてしまった男のペーソスが身に沁みてもの哀しい
隣りはなにを 『日本』 同39年6月号	神戸の北野町が舞台である。住民の大半は外国人で、他人の生活に干渉しないという気風がある。混血の老婦人は元住んでいた邸を手放して、零落してその隣に越している。彼女はあの邸に住むと必ず不幸になると固く信じていた。隣りの家で主人が殺され、それに以前の夫の分身を見た老婦人は、隣りの細君を殺害者として告発したが、それは自分の分身だったからではなかったか。長年抑圧されていたものからの解放がもたらす秘密は不気味である
南十字星を埋めろ 『小説現代』 同40年9月号	南十字星は星座であるが、作品では、ガスライターの商標名となっている。南米を舞台にした輸入ライター騒動が扱われている。商事会社員の主人公が相手の品物の強盗事件にぶつかったが、念のため見とどけてみたら、一挙にからくりが暴露する。国情も悪ければ商社も悪い。それをさとしたとき、主人公は目もくらむほどの知恵の高みにのぼった自分を見出したのだ。軽快なタッチの物語が重大な教訓を運んでくるのだ

『笑天の昇天』 各編紹介

題 初出	『笑天の昇天』 各編紹介
神に似た眼 『小説新潮』 昭和43年6月号	●桐村敬子：わがままな社長令嬢(父は中外製鋼社長桐村章太)、大学3年生。●溝口芙美：中外製鋼資材課勤務。桐村敬子と同年。左官屋の娘、両親は既に死去。腎臓での入院歴もあり、体が弱い。●工藤光江：桐村家の女中をつとめて30年、70歳に近い。桐村家では、高齢で、へまも多い彼女を辞めさせたがっている。彼女の方でも桐村家の家族にいい感情を持っていない。●小川厚介：桐村社長のお抱え運転手。芦屋にある桐村邸のガレージの二階に住む。心が澄み切り、欲がなくなり、神様に近くなったみたいやと感じている。●岡村：桐村社長の秘書。桐村敬子の恋人。これら登場人物が織りなすストーリーの展開は… ■作中、神戸追谷墓地、明石、舞子の浜の描写もある
あんこエレジー 『別冊アサヒ芸能』 同44年8月号	神戸港は弁天浜、そこは、港湾荷役作業の労務者、アンコたちの職場であり、たむろする場所でもあった。弁天浜で荷役の監督をする貿易会社員の「私」は、アンコの一人、西脇と親しくなり、西脇の親友、竹原とも知り合う。二人が弁天浜に流れ着いた原因は、奇しくも、同じ人物(繊維関係の一流企業の専務・榎本)に根があり、二人は復讐を誓う。アンコたちが通う食堂「たなばた」の海岸小町・夏子が絡んでストーリーは進展する。さて、…。結末で、意外な人間関係が
笑天の昇天 『別冊文藝春秋』 第110号 同44年12月	舞台は中国の新疆。狂言回し、「私」は陳舜臣さんの分身。李笑天、1903年生まれ、操縦士。実在の人物？ 以下、作中の記述をニヶ所、抜粋引用します。「たまたま台湾に帰省したとき、郷里の若い生徒に英語を教えたが、そのなかに、新疆省主席であった楊増新の外孫がいた。その楊増新の暗殺事件や、新疆を戦乱にまきこんだ馬仲英のことなどを、私はかつて小説に書いたことがある。新疆で活躍した李笑天の話に、私がつよく心を惹かれるのはとうぜんであった」「スエン・ヘディンは著書『大馬の逃亡』で、一ウルクで盛世才にたいするおぼんが発覚して三人の高官が処刑された」と述べている。その三人の高官の一人が、李笑天なのである」 読売新聞社発行単行本表紙 →
三角犯罪 『小説セブン』 同45年2月号	B重工業営業部高浜啓一郎は村崎葉子とデートし、深夜に戻ったアパートで見知らぬ男の死体を発見する。鍵を挿しても玄関ドアが開かないはずで、窓ガラスを割って入ると、内側のノブにはコードが巻き付けられ、それがそばの柱にしっかりと結びつけられた「密室」であった。警察は、たれ込みもあり、窃盗グループの内輪もめと読み、素早く犯人を検挙する。しかし、高浜は「胸に兆した疑い」にこだわる
果ての姿 『オール讀物』 同45年3月号	●「私」：小説家、狂言回し。もと貿易商。●大杉：大杉物産を経営。おおまかだが度胸があって包容力に富む「大将の器」。「私」の知人。●吉野：富士貿易を経営。計算が緻密で策謀を得意とする軍師的人物。「私」の知人。大杉と吉野は、もと同じ会社に勤めていたが前後して退職、それぞれ独立して貿易をはじめ、競って社を成長させてきた。二人は強烈なライバル意識を持つが、その遠因は、まだ会社勤めのころ、三浦奈津子をめぐって争った恋愛レースにあった。■当時、南ベトナムはゴ・ジン・ジエム政権が末期的状況にあり、政府要人や富豪などの亡命準備が噂されはじめていた。閣僚の一人で大富豪のKも海外亡命を真剣に考え、候補地の一つ日本へも、手先、フォンを送り込んでいた。そして、一つの事故・事件？が起きる。猛スピードでハイウェイをとばしていた車が、カーブを曲がりきれずに崖から転落し、男女が死亡する。悪いヤツは誰？
古印譚 『小説新潮』 同45年10月号	●杜明圭：香港生まれの香港育ち。印鑑彫りを生業として50年、印章については見る目を持つ。ほら吹きだが、根は善良。●杜肖華：明圭の娘、26歳。日本商社のタイピスト。1970年、杜親娘は、万博見物かたがた観光で来日。神戸滞在中、明圭が、何者かに殺される。●「私」：狂言回し。香港にいた頃、杜肖華に日本語を教えたことがあり、父の死に直面した肖華の力になる。●柿原甚平：ペイント販売会社経営。一昨年、長男に社長の椅子を譲り、隠居。「古印」の収集家。75歳。ひどい神経痛に悩まされていて、外出できない。「私」、杜親娘、柿原は以前からの知り合い。●大谷貞市：柿原の秘書。柿原とは中学の同級生。しかし古印収集では先輩格で、柿原に古印熱を吹き込む●宮沢欽吾：大学の文学部の教授。亡くなった柿原夫人の弟。●岡井教授：宮沢欽吾の同僚。考古学が専門で古印にも詳しい。さて、杜明圭殺しの犯人は？



『南十字星を埋めろ』『笑天の昇天』いくつかの補足

陳舜臣さんの舞台となった北野町界隈

陳舜臣さんの著作には、神戸を舞台とした作品が多い。そして、それも、山手か港、つまり、疎開中と、陳さんが作家になってからの住まいに近い北野町から山本通あたりと、三色の家の時代に過ぎた海岸通り及び神戸港あたりというこ

とになります。

陳さんは、『南十字星を埋めろ』『隣

りはなにを』の冒頭でも、かなり詳細に北野町界隈を描写しています。

左に、『神戸というまち』（一九六五年 至誠堂）からイラストを一枚借用し、転載しました（一部加筆）。

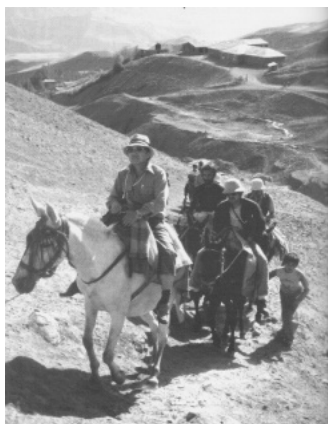


アラムートの暗殺教団

『南十字星を埋めろ』『あほだらお秋』（初出は、『問題小説』1971年9月号）にアラムートの暗殺教団の話が詳しく出てきます。陳さんは1982年にNHKシルクロード取材班と一緒にアラムートに行かれますが、それ以前からずっと、この話は、陳舜臣さんにとって、自家薬籠中の物だったといえます。

特に、アラムート行後の執筆、『チングス・ハーンの一族』（初出は、朝日新聞1995年4月～97年5月）と『桃源郷』（初出は、『小説すばる』2000年1月号～01年7月号）では、活写されています。

右は、ロバの背に跨がりアラムート山に登る陳さん。集英社『陳舜臣中国ライブラリー26』より



陳舜臣作品の舞台の一つ追谷墓地

『笑天の昇天』『神に似た眼』の文中に、

桐本章太と溝口芙美。神戸追谷墓地、溝口家の墓前。

という書きのような記述があります。陳舜臣さんの作品には、この追谷墓地のことはよく出てきます。例えば、『残系の曲』の「早春」の章です。詳しくは本通信No. 15を参照下さい。

ところで、追谷墓地ですが、ここには陳家の墓があります。でも、陳舜臣さんは、別の墓地に眠っています。

右上の画像の標識は、「海外移住と文化の交流センター」横の坂を登ったところにあります。この道を上ったところが広い墓地の入口です。

